

ハーマン・メルヴィルの『幸福な失敗』について

池 田 正 博*

On Melville's *The Happy Failure*

Masahiro Ikeda

要 旨

ハーマン・メルヴィル (Herman Melville, 1819～91) は、『ピエール、曖昧なるもの』(*Pierre, or The Ambiguities*, 1852) 後の短編のいくつかに、限定された叙述形式という手法を取り入れ、周到な意図の下に独特な語り手を生み出した。この語り手は、その役割に極端な制約を課されていて、主人公の内面世界に立ち入りその心理や意識を代弁することができない。

語り手の役割に課されたこのような制約のために、主人公は実質的には沈黙のあるいは寡黙な仮面のような存在となり、物語は謎を孕んだ曖昧性を帯び、読者の作品解釈も限定された、あるいは多様なものとなる。メルヴィルは、このような限定された叙述形式を導入することによって、主人公と主要な登場人物の実体の探究を、読者に迫るのである。『幸福な失敗』(*The Happy Failure*, 1854) は、このような創作手法による短編の一つであり、その持つ意味や特徴について検討してみたい。

(I)

『幸福な失敗』は、『書記バートルビー』(*Bartleby, the Scrivener*, 1853) のみならず、この時期に発表された『ヴァイオリン弾き』(*The Fiddler*, 1854) や『ジミー・ローズ』(*Jimmy Rose*, 1855) と同様に、語り手による全面的な叙述形式を持つ作品である。一般的に、このような形式を持つ作品においては、語り手の性格と役割は作品解釈を左右する大きな影響力を持つものである。『幸福な失敗』の語り手は、真の現実世界や人間探究などとはいまだ無縁な少年であるためか、主人公の内面世界に立ち入りその心理や意識を代弁できない人物になっている。つまり、語り手による全面的な叙述形式でありながら、それにはこのような制約が課されているのである。さらには、このような語り手もまた主人公も、読者の理解にとって真に重要であると考えられる事柄について、一切説明しないという制約の下に置かれている。語り手と主人公に課されているこのような制約は、まずは読者の作品解釈を拘束するものであるが、しかし、その一方で、読者が意識せざるをえない様々な疑問に答えることなく放置し、その結果、物語を謎めいた曖昧性を帯びたものにするものでもある。このような特徴は、勿論作者メルヴィルの意図的な手法に因る

平成17年9月20日受理 *教養部教授

ものと言わなければならない。

『幸福な失敗』は、物語の次元においては甚だ単純なストーリーであるが、しかし、作品の持つ意味となると、決して単純ではなさそうである。それは、前述したような手法の下に置かれた語り手の叙述の中にも、作品の持つ意味にとって決して無視できない暗示的、象徴的な意味を持つ言葉が散見されるからである。また、作品の手法と特徴そのものが、むしろ主人公の正体や彼の試みの妥当性などということ、読者に意識させるからでもある。語り手の叙述には示されていない事柄が、むしろ作品解釈に重要なものとして、読者の問題意識に捉えられるという結果になっている。つまり、作品は、その根底に実体の探究という問題を孕んだものになっているのである。ストーリーそのものは単純であるが、しかし作品の持つ意味は決して単純なものではないと考えられるのである。実体の探究という問題を孕んだ『幸福な失敗』は、やはりメルヴィルの作品にふさわしい意味や特徴を具えていると言わなければならない。

(Ⅱ)

『幸福な失敗』は、その根底に実体の探究という問題を孕んだ作品であるが、物語は実質的には半日ほどの出来事であり、ストーリーそのものも甚だ単純である。語り手の少年は、ある夏の朝、伯父との約束通りに川岸で彼と合流し、伯父の黒人従者ヨーピーを加えた三人で長方形の大きな箱を小舟に積み込み、人目を警戒しながら10マイルも上流のクアッシュ小島に向かって逆上って行く。箱の中身は伯父が10年の歳月をかけて完成した「水圧・流体圧力装置 (Hydraulic-Hydrostatic Apparatus)」という排水装置である。川沿いの湿地を毎時間1エーカーの割合で沃土に変える能力を持つ装置で、実験に成功すれば莫大な利益と名声、栄誉が見込める、と伯父は言う。しかし、実験は完全な失敗に帰し、怒り狂った伯父はこの排水装置のコイル状の部品を引き剥しねじり取っては投げ捨てる。しかし、平静に戻った伯父は、この装置の完成までの10年の間、幸福というものを忘れてこの発明に熱中してきたことを反省し、「失敗してよかった」「失敗が自分を善良な老人にしてくれた」「この失敗ゆえに、讃えるべきは神」と言う。語り手も、この実験の失敗によって自分も賢明になったと告げる。

語り手によれば、主人公は、失敗することによってある種の幸福な生きかたをする手掛かりを得たことになる。彼は、実験に取りかかる際に「全ては適正な調整にかかっている」と述べるのであるが、彼は失敗によって生きかたを「適正に調整」したということになる。このように、ストーリーそのものは甚だ単純である。しかし、前述したように、語り手は主人公の内面世界に立ち入りその心理や意識を代弁することができず、また物語の解釈にとって重要であると考えられる事柄については、語り手も主人公も一切説明をしない。その結果、物語は謎を孕んだ秘密の雰囲気を支配的背景とし、しかもそれは喜劇性を伴ったものになっている。

物語の解釈にとって重要なものでありながら、全く不明のままにされている事柄は、次のようなものである。主人公は、実験の失敗に怒り狂いはするが、なぜ残念とも無念とも言わないのか。なぜ一度の失敗で、しかもその失敗の原因を全く検証もせずに、その場に打ち捨ててしまうのか。彼の発明した装置は、いかなる原理で作動する筈のものであり、また本当に少しでも作動する可

能性のあるものなのか。ただ単に、全く可能性のない代物を組み立てるだけの作業に、無駄に10年の歳月を費やしただけではないのか。読者はこのような事柄を意識しないではいられないが、主人公はこれらについて一切言及させず、その結果、読者にとっては、彼自身も彼の発明した謎の装置といわば一体化した、謎めいた人物になっている。また語り手も、読者が当然意識せざるを得ないこれらの事柄について、主人公に質問を試みることもない。これは、単にこの作品が文字通りの短編であるという制約や、語り手が世馴れない無垢な少年であることに因るわけではないであろう。語り手は、このような質問さえできないような無能な少年ではない。彼は、古代のローマ皇帝がポンティナ沼沢地の干拓に失敗したなどという知識を、持ち合わせているのである。

語り手も主人公も、以上に述べてきたきたように、一定の制約下に置かれている人物である。読者にとって当然の疑問点であるこれらの事柄については、主人公は一切説明せずまた語り手もこれらについて問いたすこともない。特に、主人公が装置の実験に失敗した時に見せる反応や言動は、少なくとも物語の次元においては、甚だ不可解であり謎めいている。「水圧・流体圧力装置」なるものも、実験現場に到るまでは、中身の見えない「不可解な謎の箱」なのである。主人公は、このような「不可解な謎の箱」と一体化した謎めいた人物になっているのである。メルヴィルは、作品の世界に、特異な手法を用意し、主人公の中身を、つまり正体を探究することを、読者に求めていると考えられる。

(Ⅲ)

物語は、謎を孕んだ秘密の雰囲気を支配的背景としているが、それは謎めいた人物による謎の装置の実験にふさわしいものであり、同時にそれは喜劇性を伴ったものでもある。また、ストーリーの展開そのものが、喜劇性を伴うものになっている。そして、謎めいた人物による謎の装置の実験へのアプローチは、いわば段階的に徐々に進められその謎が増幅されるという工夫を持つものになっている。物語の冒頭において、語り手は、伯父との約束通りに川岸にやってくるが、この時点では「まだ、すばらしい実験の正体はその計画者以外の人間には謎であった (As yet, the nature of the wonderful experiment remained a mystery to all but the projector) p.210」と告げる。彼は、この実験は100万ドルの大金を生む、としか聞かされてはおらず、暑い日盛りの中を10マイルも川を逆上って行くとは知らされてはいない。そして、このような語り手が、ヨーピー (Yorpy) の背に運ばれてくるのを望見すると、それは「ガザの門柱の一つ」のようなものであるが、近づいてみるとそれは大きな「箱」であることが判明する。しかし、この時点ではまだ箱の中身は語り手にも不明なのである。

... Presently, I saw my uncle advancing beneath the trees, hat off, and wiping his brow; while far behind staggered poor old Yorpy, with what seemed one of the gates of Gaza on his back.

....

Upon the black's staggering up to the skiff, I perceived that the great gate of Gaza was transformed into a huge, shabby, oblong box, hermetically sealed. The sphinx-like blankness of the box quadrupled the mystery in my mind. (p.210)

「その箱の不可解なのっぺりした姿が僕の心の中にこの箱の謎を4倍にも増幅した」と告げるのであるが、上掲文中の‘hermetically sealed’は〔防水封印がされている〕ということであろうが、‘hermetically’には‘magically（魔法のように）’、‘alchemically（錬金術によって）’という意味もあり、その点でこの言葉は暗示的でもあり、謎の箱にふさわしいものである。語り手は、さらに次のようにも言う。「この箱は織物収納用のいたんだ古い箱を釘づけしたものにすぎない（... it's nothing but a battered old dry-goods box, nailed up.） p.210）」「なんとわびしい感じの、光沢のない、古い灰箱か（What a forlorn-looking, lack-lustre, old ash-box it is.） p.210」。語り手は、まだこの時点では箱の中身については知らされていないが、彼には箱は「不可解な謎」そのものでもありまた「織物収納用の箱」、「古い灰箱」でもある。一方、従者のヨーピーにとっては、「この箱はここ10年来もの厄介もの（De box has been my cuss for de ten long 'ear.） p.211」なのである。この時点では、箱の中身は不明である。伯父は、箱の中身や実験の目的など具体的なことは明らかにしないのである。ついで、「不可解な謎の箱」は三人の手によって小舟に乗せられるが、それは取り扱いに細心の注意を要するものであり、それを怠ると爆発する、と伯父は言う。しかし、箱の中身についての彼の説明は、クアッシュ小島への出発後まで待たされる。箱の中身は彼の発明した「水圧・流体圧力装置」で、その実験に成功すれば莫大な利益と名声、栄誉を見込めるが、腹黒いスパイに狙われていると言ひ、絶えずあたりに目を配る。人目を警戒しながら、秘密裡に搬入し秘密裡に実験しなければならない。しかし、伯父は、この装置の作動原理については一切説明せず、また語り手も説明を求めることもない。語り手は、伯父の巧みな言葉と言ひ回しに乗せられて、装置そのものよりも、むしろ莫大な利益と名声、栄誉をもたらすという伯父の言葉に引きつけられる。語り手にとって、当初は「不可解な謎の箱」、「織物収納用の箱」、「古い灰箱」であったものが、いまこのような価値あるものとして彼を魅了する。彼は、いま〔外見と実体は別ものだ〕という思いであろうが、しかし、彼はまだ箱の中身を見たわけではないのである。

このように、「水圧・流体圧力装置」なるものへのアプローチは、その謎にふさわしく、徐々に進められるのである。その謎は、クアッシュ小島に向かって、10マイルも川を逆上って行く過程で増幅され、また主人公も、この過程を通して、謎めいた人物になってくる。「水圧・流体圧力装置」なるものの中身を、語り手が、従って読者が、初めて目にするのは、伯父が実験に取りかかる直前である。ついに箱の中身を目にする機会を得た語り手は、その様を次のように告げる。

... All eagerness, I peeped in, and saw a surprising multiplicity of convoluted metal pipes and syringes of all sorts and varieties, all sizes and calibres, inextricably interwreathed together in one gigantic coil. It looked like a huge nest of anacondas and adders. (p.215)

箱の中身は、「あらゆるタイプと種類、あらゆるサイズと口径の、渦巻き状の金属パイプと注入部品が、解きほぐせないほどに絡み合い、1つの巨大なコイル状になっている驚くべき構造物」である。それは「大蛇とマムシの巨大な巣」のように見えるのである。このような中身は、謎の装置にふさわしい構造になっているが、しかし、語り手は、この装置の原理などについて伯父に説明を求めることはなく、箱の中身に、ただ驚くだけである。主人公の発明した「水圧・流体圧力装置」なるものは、語り手にとっても読者にとっても、謎の装置であることに変わりはないのである。「大蛇とマムシの巨大な巣」という表現そのものも、読者には、この装置の謎を象徴しているものとして、意識されるものであろう。

以上のように、「水圧・流体圧力装置」なるものへのアプローチは、その謎にふさわしく、徐々に進められ、その過程でその謎が増幅され、また主人公もこの過程を通して謎めいた人物になってくる。そして、この装置が、いかなる原理で作動する筈のものか、少しでも作動する可能性のあるものであるのか、などは不明のままなのである。物語は、このような謎めいた人物による謎の装置の実験にふさわしく、それに到る過程は物語の初めから謎を孕んだ秘密の雰囲気支配的な背景になっているのであるが、しかしそれは、喜劇性を伴ったものでもある。

(IV)

物語の持つ喜劇性といえ、ストーリーの展開そのものが喜劇的でもある。主人公は、莫大な利益と名声、栄誉が見込める発明装置を、スパイに警戒しながら10マイルも川を逆上って実験現場に搬入する。10年もの苦勞の歳月を費やして発明した装置が全く作動しないことが判明するや、残念とも無念とも言わず、即座に部品を引きちぎりねじり取っては投げ捨てる。この一度の失敗で装置をその場に打ち捨て、「失敗してよかった」などと言い、それまでの生きかたを簡単に変えてしまうのである。このように、ストーリーの展開そのものが喜劇的であるが、とりわけ、主人公の実験前の自信や言動と実験失敗後の反応や言動との強烈な対照性が、物語に著しい喜劇性を生み出している。このような意味において、主人公が成功を期して秘密裡に実験しようとする小島の名前が、〔無効にする (annihilate)〕という意味を初め多様な意味を持つことに、注目する必要がある。主人公は、実験現場のクアッシュ小島 (Quash Isle) に向かって決然と出発するが、しかし、結果的にはこの島の名前が意味するような結果、状況に到る。このような小島の名前は、結果的には、主人公の試みの結果と状況を早くも暗示するものであるが、これらについては、後述することとする。

物語は、謎めいた人物による謎の装置の実験にふさわしく、それに到る過程は物語の初めから謎を孕んだ秘密の雰囲気支配的な背景になっているが、しかしそれは、喜劇性を伴ったものでもあることは、次のような件にも感じ取れる。主人公は、装置の実験を10マイルも逆上った場所で行うのは苦勞した発明の成果を腹黒いスパイに盗まれないためだと言い、警戒を怠ることなく絶えずあたりに目を配る。そして、声を潜めて次のようにも言うのである。

‘Wait till that horseman yonder passes!’ he whispered again, pointing to a speck moving

along a lofty, riverside road, which perilously wound on midway up along line of broken bluffs and cliffs. 'There-he's out of sight now, behind the copse . . .

'Ain't that a boy, sitting like Zaccheus in yonder tree of the orchard on the other bank? Look youngstar--young eyes are better than old — don't you see him?' (p.214)

語り手には、伯父の言う「少年」は白い枯れ枝に過ぎない。「少年」の姿は全く認められないのである。しかし、伯父は「彼はスパイだ、俺には分かっている (He's a spy — I know he is) p.214」と言いながらも、しかし「彼を無視する (I defy the boy) p.214)」ことにするとも言うが、その後も警戒を怠らない。ところで、いま伯父が引き合いに出す「ザアカイ」は〈ルカによる福音書〉にみえる背の低い取税人で、イエスの姿を見ようとして桑の木に登り、後にはイエスを食卓に招いた人物のことと思われる。伯父がわざわざ「ザアカイ」を引き合いに出すのは、自分の発明した装置によって自分は人類の救済者となる、という自負を、甥に聞かせるためであろう。そして、さらに秘密の雰囲気有一段と喜劇性を伴ったものになっているのは、一行がクアッシュ島に到着してからである。

実験に取りかかる伯父は、湿地の草むらに完全に身を潜めてかがみ込み、ポケットからハンマーとレンチを密かに取り出し、装置の入った箱を叩きその音に我にかえて元の警戒心に立ち返り、声を潜めて語り手とヨーピーに見張りを命ずる。しかし、伯父は、装置の入った箱をハンマーで叩いたりした後で、大きな声で語り手とヨーピーに戻ってくるように命じるのである。そして、実験を開始しても、「スパイ」に警戒しながら苦勞して搬入してきた装置は最初から全く作動しない。実験に失敗した伯父は、怒り狂って大声でわめき出し、「大蛇とマムシの巨大な巣」のような装置から部品を引きちぎりねじり取っては投げ捨てるのである。失敗しても家人以外には知られたくない、と言っていた伯父は、いま一時発狂したかのように大声でわめくのである。しかし、彼は、やがて語り手の懸命な勧めを受け入れて、部品を拾い集めて元の装置に再生し再び実験を試みるが、全く作動しない。物語は、以上に述べてきたように、謎めいた装置の実験にふさわしく秘密めいた雰囲気を支配的な背景とし、しかもそれは喜劇性を伴うものになっているのであるが、とりわけ実験の件はそれが甚だしいものになっている。

(V)

『幸福な失敗』は、語り手によれば、10年もの間途方もない発明の夢に取りつかれてきた主人公が、正にその実験の失敗によって真の自己を取り戻し、現実世界に立ち返った後に、やがて穏やかな死を迎える物語である、ということになる。そして、結果的にみれば、主人公の実験の失敗と自己回帰は、小舟で出発する時点で実験場所の川中の小島の名前に、早くも暗示されていると考えられるのである。主人公は、この時点では、謎の箱の中身や実験の目的などの具体的なことは語り手に教えない。しかし、「言うておかねばならんのは、我々はクアッシュ島に向かうということだけだ、と伯父はキツパリと言った ('All that I have to say', said my uncle, firmly, 'is that we are bound to Quash Isle.') p.211)」のである。主人公は、決然と実験場所のクアッシュ

小島に向いそこでの実験の失敗によって、それまでの生きかたを変えるのである。このような結果と状況は、‘Quash’ という言葉の持つ多様な意味通りになっていると考えられる。

‘Quash’は、[無効にする (annihilate)]、[打ち砕く (destroy, break)] という意味を持つ言葉であり、また[感情・苦しみなどを和らげる (quell)]、[感情・欲望などを抑制する (suppress)] という意味の言葉でもある。主人公が、この小島の名前がこのような意味を持つことを、意識しているのかどうかは不明であるが、しかし、装置の実験をする小島の名前が、このような意味をもつものであることは、無視できないことであろう。便宜的に言えば、主人公が永年苦勞して発明した「水圧・流体圧力装置」の実験の「試みは全く無益だった (the attempt was wholly vain) p.216」のであり、莫大な利益と名声、榮譽を得る夢は「打ち砕かれた」のである。そして、主人公はクアッシュ島での実験の失敗によって、途方もない発明の夢をいわば「抑制し」永年の労苦を「和らげた」、ということになる。このように、「クアッシュ小島」は、結果的には、主人公が迎える結果と状況を、早くも暗示するものであり、このような暗示そのものが、この時点での主人公の途方もない発明装置に賭ける夢と意気込みを、喜劇性を伴ったものにするものでもある。

既に述べたように、ストーリーの展開そのものが喜劇的であり、とりわけ、主人公の実験前の自信や言動と実験失敗後の反応や言動との強烈な対照性が、著しい喜劇性をも生み出していることは、これまでに述べてきたことから明らかであろう。主人公の顔の様子も、実験の前と後では、当然のことながら、次のような対象的なものである。自信を持って最初の実験に臨む時には、「真に気高い輝きが彼の灰色の目、頭髮、顔の皺を照らしだしていた (a really noble gleam irradiated his gray eyes, locks, and wrinkles) p.215」が、実験の失敗後には、彼の顔は「やつれ縮んで、ウドンコ病に罹ったブドウのようなカビだらけの白いもののように見えた (It seemed pinched, shrivelled into mouldy whiteness, like a mildewed grape.) p.218」のである。また、成功すれば莫大な利益と名声、榮譽を見込めるといふ装置の実験に失敗し、クアッシュ島を離れた時には、「ひどい失望の色はもうその時にはほとんど消え失せていた (the terrible blight of his face had almost departed) p.218」のである。そして、主人公は、帰途の小舟の中で語り手に次のように言う。「お前よ、わしの忠告を受け入れて、幸福以外のものは何であれ決して見つけようとはするな (Boy, take my advice, and never try to invent anything but — happiness.) p.218.」。10年もの労苦の果てに「水圧・流体圧力装置」の発明にいわば見事に失敗した主人公は、いま ‘find’ を意味する古い ‘invent’ という言葉を意識的に用いているように思われる。彼は、また突然に、クアッシュ小島に戻って失敗した装置を回収し部品の鉄を売ればヨーピーはタバコ代が得られる、などとも言い出す。その主人公とヨーピーとのやり取りの件と、そしてヨーピーの言葉を受けて主人公が自分は失敗して良かったと言う件は、次のように告げられている。

‘It will make a good wood-box, boy. And faithful old Yorpy can sell the old iron for tobacco-money.’

‘Dear massa! dear old massa! dat be very fust time in de ten long ‘ear yoo hab mention kindly old Yorpy. I tank yoo, dear old massa; I tank yoo so kindly. Yoo is yourself agin in de ten long ‘ear.’

'Ay, long ears enough,' sighed my uncle; 'Esopian ears. But it's all over now Boy, I'm glad I've failed. I say, boy, failure has made a good old man of me. It was horrible at first, but I'm glad I've failed. Praise be to God for the failure!' (p. 219)

ヨーピーは、主人の元々は取るに足りない程度の気遣いに接して、主人が本来的な自己に立ち戻ったのだと感じるが、このことは、これまでの主人公のあり方を物語るものでもある。ヨーピーによれば、彼の主人はこれまでの10年の間本来の自己から離れたあり方をし、またそのような主人公から彼は人間的な取り扱いを受けてこなかったことになる。一方 主人公は、「失敗が自分を善良な老人にしてくれた」と言い「この失敗故に、神をこそ讃えるべき」とも言うのであるが、しかし莫大な利益と名声、榮譽を求めて湿地を沃土に変える排水装置の発明に没頭すること自体は、元々決して悪いことではない筈である。また、彼はヨーピーを人間的な取り扱いをしてこなかったことだけをもって、自分を善良な人間ではなかった、と思いつめていなくてもよいようである。また、発明に没頭すること自体は、必ずしも本来的な自己からの遊離を必要とするわけでもないであろう。

(VI)

主人公が実験に失敗した時にみせる反応や言動は、甚だ不自然であり謎めいている。主人公は、実験に失敗して怒り狂いはするが、しかし残念とも無念とも言わず、いきなり装置の部品を引きちぎりねじり取って投げ捨てる。一度の失敗でその失敗の原因を全く調べようとせず、その場に打ち捨ててしまう。主人公が本当の発明家であり、その装置が少しでも作動する可能性のある発明品であれば、彼はこのような不自然で謎めいた反応や言動を見せることはないのではないか。装置は全く作動しないが、元々この装置はいかなる原理で作動する筈のものであるのか。本当に少しでも作動する可能性のあるものであったのか。読者はこのような問題を意識しまた疑念を抱かざるをえないが、しかし、主人公も語り手もこれらに答えることはないのである。つまり、主人公が、実験に失敗した時にみせる反応や言動は、少なくともそれまでの彼が謎めいた人物であり謎めいた生きかたをしてきたことを物語るものである。

主人公は、不可解な謎の装置と一体化した謎めいた存在であり、読者には様々な疑問が残される。そして、このような疑問こそ、決定的に主人公を謎めいた人物とするものであり、読者に彼の正体を探究せしめる根本動因となるものである。そして、さらには、次のような推測を妥当なものとするものであろう。

主人公が、実験に失敗して怒り狂いはするがしかし決して残念とも無念とも言わないのは、彼が本当の発明家ではなく、また彼の作った装置も本当は的外れなものであったからではないか。湿地を毎時1エーカーの割合で沃土に変える排水装置の発明は、当初から彼の能力を越えた試みではなかったのか。彼は、帰途の小舟の中で、打ち捨てた装置を回収すれば、「装置を内蔵した木箱は立派な薪箱になるだろう。忠実な老ヨーピーはタバコ代を得るために部品の鉄を売れるだろう」と言うのであるが、彼の作った排水装置はその程度の代物であったのではないか。ヨー

ピーにとっては「この箱はここ10年来もの厄介もの」に過ぎなかったのであるが、主人公にとっても「厄介もの」ではなかったのか。それ故に、実験に失敗しても残念とも無念とも言わず、また装置をなんの未練もためらいも見せずに実験現場に打ち捨ててしまうことができるのではないのか。実験に失敗した時の主人公の反応と言動は、このような意味を帯びたものではないだろうか。

便宜的に言えば、主人公が、実験に失敗するや、装置の部品を引きちぎりねじり取って投げ捨てる行為は、いわばそれまでは不可解な謎の装置と一体化していた自己を、それから引き剥がすという激しい衝動を意味するものと受け取れる。また最後には実験現場に装置を打ち捨てるという行為は、このような衝動に基づく最後の決別を表すものでもあろう。つぎに、上掲文中の主人公の「実験の失敗が私を善良な老人にしてくれた」という言葉によれば、彼はそれまでは「善良」ではなかった、ということになる。しかし、「善良」でなかったというのは、ただ単にヨーピーを人間的に扱ってこなかったことをのみ意味しているとは考えられない。また、排水装置の発明に没頭すること自体を、「善良」ではないとは言えないであろう。

(VII)

『幸福な失敗』は、実体の探究という意味を持つものでもある。作者メルヴィルは、制約を課した叙述形式を導入し、主人公を、読者に様々な疑問をいだかせる謎めいた人物とし、その正体についての探究を読者に求めているものと考えられる。しかし、読者の様々な疑問について、主人公にも語り手にも説明はさせず、'Quash'、'Zaccheus'、'Esopian ears' という文字通り片言隻句と言うべき言葉を暗示的、象徴的な意味を持つものとすることによって、その手掛かりを用意していると考えられる。'Quash'、'Zaccheus' の持つ暗示的、象徴的な意味については、すでに述べた通りであるが、いま上掲文中の主人公の 'Esopian ears' という言葉も、決して無視できない言葉である。メルヴィルが、このような一見して場違いとも言える言葉をわざわざ用いさせていることに、注目しなければならないのである。まず、文中のヨーピーの言葉 'Yoo is yourself agin in de ten long 'ear.' の "ear" は "year" であるが、主人公の言う 'Esopian ears' の "ears" は文字通り "ears" であり、[イーソップの寓話中の耳] を意味するものと受け取れる。そして、'long ears enough' の "long ears" は、「永年」ともまた「長い耳」とも受け取れる。ウィリアム・ディリングラム (William B. Dillingham) は、このような主人公の言葉に、イーソップの〈ライオンとロバの耳〉の寓話の教訓を見出し、それについて次のように述べている¹⁾。「勿論、この寓話の持つ教訓は真に自分の持ち合わせてはいない偉大さを装おうとしないということである (The moral, of course, is not try to put on a greatness that is not really in you.) 」と述べ、それに引き続いて「『幸福な失敗』において、メルヴィルはライオンになろうと試みるロバを描き出し、『ヴァイオリン弾き』ではロバになろうとするライオンを提示している (In "The Happy Failure" Melville depicts an ass trying to be a lion; In "The Fiddler" he shows a lion trying to be ass.) 」と述べている。

ウィリアム・ディリングラムのこのような指摘、解釈は、真に妥当なものと考えられる。実験に

失敗した主人公は、「失敗して良かった」「失敗が自分を善良な老人にしてくれた」と告げていたのであるが、これらの言葉は、ヨーピーを人間的に扱ってこなかったことだけを反省しての言葉ではないであろう。彼は、人類への偉大な貢献者となるという自負をも抱きながら、莫大な利益と名声、栄誉が得られるという発明の実験に失敗しても、残念とも無念とも言わず、一度の実験に失敗しただけで、簡単に装置を打ち捨てる。このような主人公は、自分の能力を越えた途方もない発明の夢に熱中し、その失敗によって自己のこの事実を実感、確認し、この発明の継続を何の未練もためらいもなく放棄するのであると考えられる。つまり、主人公が善良でなかったというのは、ウィリアム・ディリンガムの指摘からも明らかなように、自分の能力を越えた途方もない発明に熱中するという、自己を偽った生きかたをしてきたことを告白するものであると受け取れる。「失敗して良かった」「失敗が自分を善良な老人にしてくれた」という言葉は、このような意味を持つものであろう。また、ヨーピーの「あなたは、10年かかってまた元の自分に戻ったのです」という言葉は、主人公がただ単にヨーピーに再び優しい態度をみせるようになったことをのみ言い表すだけでなく、結果的には、主人公が自己を偽った生きかたを放棄し本来の自己に立ち戻ったことを言い当てるものにもなっている。

このような、主人公の最後の有りようを、装置の実験場所である'Quash isle'という言葉そのものの持つ多様な意味に則して、繰り返し要約すると、次のようになる。主人公が永年苦勞して発明した「水圧・流体圧力装置」の実験の「試みは全く無益だった」のであり、莫大な利益と名声、栄誉を得る夢は「打ち砕かれた」のである。そして、彼はクアッシュ小島での実験の失敗によって、途方もない発明の夢をいわば〔抑制し〕永年の労苦を〔和らげた〕ということになる。実験に取りかかる際に「全ては適正な調整にかかっている」と述べていた主人公は、最後には失敗によって生きかたを正に「適正に調整」したということになる。「この失敗故に、神をこそ讃えるべき」という彼の最後の言葉は、生きかたを「適正に調整」することができたという彼の安堵の心境を端的に表明しているものであろう。

(VIII)

『幸福な失敗』の中心テーマを、リチャード・ハーター・フォグル (Richard Harter Fogle) は「失敗の持つ価値についての考察」であると指摘している²⁾。しかし、『幸福な失敗』は、それと同時に、作品の根底に、実体の探究という問題を孕んでいる。このような問題は、すでに述べてきたように、制約を受けた語り手による叙述形式がもたらす結果である。メルヴィルは、物語を全面的に語り手によって告げられる叙述形式を具えたものとしながら、その語り手を、主人公の内面世界に立ち入りその意識や心理を代弁できない人物としている。そして、このような語り手も主人公も、読者の理解にとって不可欠であると考えられる事柄について一切説明をしないという制約の下に置かれている。このような制約は、まずは読者の作品解釈を拘束すると同時に、その一方で、読者が意識せざるをえない様々な疑問に答えることなく放置し、その結果、物語を謎めいた曖昧性を帯びたものにするものでもある。

そして、語り手と主人公に課されたこのような制約は、短編の持つ制約や、語り手が真の現実

世界や人間探究などとはいまだ無縁な無垢な少年であるという設定に因るものではないと考えられる。作者メルヴィルの創作手法に基づく意図的なものであると言わなければならない。なぜならば、制約を課された語り手による叙述の言葉の中にも、すでに具体的に述べてきたように、作品の持つ意味を決定づける、暗示的、象徴的な意味を持つ言葉が見い出されるからである。その結果、作品は、その根底に実体の探究という問題を孕んだものであることが明瞭になってくるのである。ストーリーそのものは甚だ単純であるが、しかし作品の持つ意味は決して単純なものではないと考えられるのである。『幸福な失敗』は、やはりメルヴィルの作品にふさわしい意味や特徴を具えていると言わなければならない。

注

The Happy Failure からの引用はつぎのテキストに拠る。*The Works of Herman Melville, Standard Edition*, Vol. X III. (New York: Russel & Russel), 1963.

- 1) William B. Dillingham, *Melville's Short Fiction* (Athens: The University of Georgia Press, 1977), p.159.
- 2) Richard Harter Fogle, *Melville's Shorter Tales* (Norman: University of Oklahoma Press, 1960), p.58.

Summary

For some of the post-*Pierre* short stories, Herman Melville provided himself with the limited narrative style and created, with calculated intent, particular narrators who have this extreme restriction imposed on their role: they are unable to dive into the the heart and consciousness of the heroes, and therefore can not represent them at all.

Due to the restriction imposed on the narrator's role, the heroes are represented eventually as silent or reticent mask-like characters, and the stories bear ambiguity with a lingering touch of mystery, allowing limited comprehension or otherwise diverse interpretations. *The Happy Failure* is one of the stories which were created in this literary style. I intend to discuss the characteristics of the story and to present my interpretation of it.